

審査の結果の要旨

氏名 井ノ口哲也

本論文は、中国後漢時代の知識人の経学に対する様々な治学スタンスを分析し、それを通じて後漢経学の性格を考えその正確な輪郭を定めようとしたものである。全体の構成は6章からなっている。

第一章では、経の総称が「五経」に定着した両漢交替期と、別行の経と伝が合併された後漢後期に経学史上の二つの画期を認め、その間の思想的営為を自らの分析対象とする理由を説明する。また後漢思想史の独自性を明示しない従来の叙述方法に対して限界を指摘し、資料の再検討の必要なことを主張する。第二章では、皇帝権力を背景に讖緯によってまとめられた五経を「古学」修得者が修めたことを明らかにする。第三章では、経学以外の諸学も修得した「古学」修得者において経学が相対化されたことを論じる。第四章では、経学の継承と伝授の両面を分析した結果、「通」の定義を修正し、また官界や俗世間との関与を避ける「教授」者の傾向を指摘する。第五章では、経学と諸学の関係を考察し、『七略』の学術分類が支持されたことを確認する。第六章では、経義や経文を正す営為を考察し、この種の営為の一齣にすぎない白虎観会議と熹平石経を過大視する必要のないことを説いている。

本論文において第一に評価すべきは、日本の学界で前漢経学にくらべて検討される機会が乏しかった後漢経学に考察対象を絞り、多角的な視点からその独自性を解き明かしたことである。その結果、「儒教の国教化」など、漢代経学を説くときに常用される言い古された旧来のパラダイムから一定程度自由になることに成功した、ということができる。第二に評価すべきは、当時の知識人の治学方法や思想的営為について具体的に考察したことである。第四章の「誦（暗誦）」と「通（兼通五経）」、「伝（家伝）」と「教授」の分析などによくあらわれている。

本論文は後漢経学の全体像の解明を目的とした結果、個別思想の分析についてはいまだ十分ならざるところもあるが、所期の目的を達成しており、後漢思想研究者に新しいビスタと視点を提供することができ、後漢経学史の解明に資すること大である。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。